『今鏡』における「おはす」の活用について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川岸, 敬子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14868

明治大学教養論集　通巻四七八号（二〇一二・一）一―一四頁

『今鏡』における「おはす」の活用について

川岸敬子

はじめに

尊敬語「おはす」の活用については、サ行変格活用説、四段活用・下二段活用両様説が行われてきたが、[1]『今鏡』の「おはす」については、宮地幸一氏にまとまった論がある。宮地氏は『おはす活用考』[2]第二章おはす活用考　二七今鏡において、サ行変格活用と推定し、いくつかの異例もそれをくつがえすものではないとする。同書は中古から中世後期にかけての文献の調査により、「おはす」はサ行変格活用であると結論づけている。

宮地氏の調査した『今鏡』は畠山本（新訂増補国史大系第二十一巻・下）であり、国史大系本が尾張徳川黎明会所蔵本、前田侯爵家所蔵本など七本を校合に用いているところから、必要に応じてそれらの諸本を参考にしている。

小久保崇明氏は『大鏡の語法の研究』[3]第一章大鏡にあらわれたる院政期の過渡的言語現象について　第二節「おはす」活用考において、千葉本系『大鏡』の「おはす」はサ行変格活用と四段活用であるが、前者が断然優勢であると述べている。その中で、畠山本『今鏡』（日本古典全書）の六例を、四段活用と見ることが極めて自然な諸例のうちに入れて

いる。『今鏡』を単独で調査しているわけではない。

本稿では、両氏の説を検討しながら、『今鏡』の「おはす」の活用について考えることにした。テキストは『今鏡本文及び総索引』[4]の本文篇であり、これも畠山本によっているが、畠山本を翻刻した和田本と国史大系本により、畠山本の本文を定めており、和田本と国史大系本とが相違する場合、普通和田本によっている。そのため、『今鏡本文及び総索引』で「おはす」の活用を調査することにも意味があると考えた。用例の検索は、総索引篇によった。

一　「おはす」の用例

1　サ行変格活用と見られるもの

サ行変格活用から見ることにする。

〈未然形〉「おはせ」一四〇例

例一　かやうにおはせむ人、（一二三―七）

例二　笛も、親の殿ばかりはをはせずやあらむ、（一六一―六）類例三七

例三　御けしきたがひたることもをはせで、（二五八―六）類例三

例四　いみじくきびしき人にぞをはせし。（一三八―一五）類例八四

例五　その御母こそ、歌詠みにをはせしか。（一五一―一六）類例一一

〈連用形〉「おはし」三四〇例

例六　いまおはすなるこそ、世の末には、かやうなる天台座主おはしがたくうけ給はれ。（二二〇―一）複合形容詞

類例一

例七　おはしあへる所はゞからしけれど、（五―七）複合動詞

例八　夜ごとにみなおはしわたしけるとかや。（二〇六―一六）複合動詞

例九　かく聞きておはしぬれば、（一六九―一四）類例一

例一〇　その家にをはしたりければ、（二七一―七）類例一〇

例一一　蔵人の頭にても十年などやをはしけむ。（一四七―一四）類例二九

例一二　昔にも恥ぢずをはしき。（一五五―九）類例一〇八

例一三　出で来がたくなむをはしける。（一五三―四）類例一三九

例一四　道心をはして、（一五一―一四）類例三四

例一五　遂に唐国にをはしても、（二七〇―七）

例一六　才もをはし、（一八二―一〇）類例七

〈終止形〉「おはす」一二九例

例一七　大将などにをはすめり。（一四一―一）類例一二

例一八　いかなる人にかおはすらむ。（五―一四）類例一五

例一九　いとかひ〳〵しき人におはすべし。（七九―一〇）類例四

例二〇　山に法印など申ておはすなり。（一八六―一一）類例二六
例二一　管絃も身の御才も、かたゞ〳〵おはすと（一九〇―二）類例一七
例二二　その取り替へられ人は、まだおはすとか。（一七六―五）
例二三　このごろの上手におはすとかや。（一七七―一〇）類例一
例二四　次郎が太郎にをはすとて、（一六七―一四）
例二五　法師になりてをはすとぞ。（一六四―七）類例二一
例二六　罪深くをはすなど（二九五―四）
例二七　修理の大夫顕季と申し女の腹にをはす。（一八三―一四）類例二二

〈連体形〉「おはする」四九例
例二八　同じ腹にをはするなるべし。（一〇八―三）類例一五
例二九　関白におはするに、（二一七―二）類例三
例三〇　この世にもかゝる人のおはするかな。（六―九）
例三一　いかにかく不覚にはおはするぞ。（二六一―一六）
例三二　をとゞの甥にをはするをぞ、子にしたてまつり給へりける。（一七五―九）
例三三　少将とておはするは、（二一七―一）
例三四　伝へておはするのみにもあらず、（二二一―一三）
例三五　いとまもをはするまゝに、（一九七―九）

例三六　才おはする人におはしき。（二〇五―三）類例一一

例三七　ときめかせ給ひし腹にをはする、山の法眼など申て聞え給。（一三四―七）類例五

例三八　尋範僧正と申ぞ、ひとり残り給て、このごろをはする。（一五三―一六）

例三九　師忠の女の腹に、師仲の中納言とておはする。（二〇七―二）連体形終止　類例二

例四〇　それもかへりのぼりて、をはするとかや。（八三―一二）連体形終止

〈已然形〉「おはすれ」一七例

例四一　人のしるしもたうとくおはすれば、（一九八―三）類例九

例四二　僧も多くおはすれど、（二二八―六）類例三

例四三　えならぬ宿世をはすれども、（二九五―一二）

例四四　かゝる人こそをはすれ。（二五九―二）類例一

〈命令形〉「おはせよ」用例なし

2　下二段活用と見られるもの

〈未然形〉「おはせ」　サ行変格活用の未然形（「おはせし」「おはせしか」以外）に同じ

〈連用形〉「おはせ」　サ行変格活用の未然形の「おはせし」「おはせしか」と次の一例

例四五　よき人は時世にもをはせ給はで、（八六―八）

〈終止形〉「おはす」　サ行変格活用の終止形に同じ
〈連体形〉「おはする」　サ行変格活用の連体形に同じ
〈已然形〉「おはすれ」　サ行変格活用の已然形に同じ
〈命令形〉「おはせよ」　用例なし

3　四段活用と見られるもの

〈未然形〉「おはさ」　用例なし
〈連用形〉「おはし」　サ行変格活用の連用形と次の三例
例四六　堀川の帝の位にをはしゝ時、（一四六―一〇）
例四七　品のすぐれてをはしゝにや、（一六二―一一）
例四八　時の関白にをはしゝかば、（一三四―一二）
〈終止形〉「おはす」　サ行変格活用の終止形に同じ
〈連体形〉「おはす」　四例
例四九　よき上達部たちにぞおはすと（一四八―三）
例五〇　あまり足ぞはやくおはすとて、（一五九―九）
例五一　上西門院にぞをはすと（二四三―八）
例五二　いとらうある人になむおはすとて、（一六七―六）
〈已然形〉「おはせ」　用例なし

〈命令形〉「おはせ」　用例なし

二　下二段活用の可能性について

ここでは一2で掲げた「おはせ給ふ」について検討する。用例の前後の部分も含めて引用すると、次の通りである。

例四五　（二条天皇八）末の世の賢王にをはしますとこそはうけ給はりしか。御心ばへも深くをはしまし、動かしがたくなむをはしましける。廿三にをはしましゝ時、御病ひ重りて、若宮に譲申させ給ていくばくもをはしまさゞりき。よき人は時世にもをはせ給はで、ひさしくもをはしまさゞりけるにや。末の世いとくちをしく、帝の御位は、限りある事なれど、あまり世を疾く受け取りておはしましけるにや。（八六―八）

宮地幸一氏は、この用例について

諸本みな同様であるが、意味上から、「或当作あ」とある頭註に従う――校註日本文学大系本はそのように直してある――のが妥当であろう。[5]

と述べている。「時世にもあはせ給はで」に改める立場である。海野泰男氏も『今鏡全釈』において、

底本・蓬左本とも「おはせ」であるが、「あはせ」の誤りと見て、口語訳のように訳しておく。[6]

と述べている。「あはせ給はで」とするのがよいのであろうか。この問題をまず考える。

1　「時世にもをはせ給はで」

「時世におはす」を「時世にあり」とする。「時世にあり」は『今鏡』にないが、似た形の「世にあり」は三例ある。「世の中に生きながらえる」「世の人に認められる」[7]意である。次の用例は前者であろうが、後者ととれなくもない。

例五三　大将殿などまだ世にをはしましける程は、殿も人も、重りかに思たてまつらるゝ事ゞもなかりける折、（一〇一―一一）

「時世にあり」にも同様の二つの意味があるとしよう。まず「世の中に生きながらえる」意の場合、「時世にもをはせ給はで」と「ひさしくもをはしまさゞりける」とがほぼ同内容になり、一文中での繰り返しが不自然である。「世の人に認められる」意なら、そのような問題はないが、最上位であることの明らかな帝について言うのは適切ではない。

以上のことから「時世にもをはせ給はで」は採らない。

2　「時世にもあはせ給はで」

「時世にあふ」は『今鏡』にないが、似た形の「時にあふ」が八例、「世にあふ」が四例ある。いずれも「いい時機に

めぐりあう[8]」「時を得て世に栄える[9]」意の用例がほとんどである。

例五四　昔時にあはせ給たる一の人に劣らせ給事なかりき。（一二九―一）

例五五　兄の法性寺殿よりも、世にあひ給へりしに、（一九二―一二）

これらを「時世にもあはせ給はで」にあてはめると、1で述べたのと同じ理由で帝への使用が不自然である。ただ、「時にあふ」には内宴という行事が時世にそぐわないという場合に用いられている、次の例がある。

例五六　世の騒ぎも出で来にしかば、時にあはぬ事ゝて侍らぬにや。（八二―四）

この「時にあふ」の意味（時世に釣り合う）が「時世にあふ」にもあるならば、「（帝ガ）時世にもあはせ給はで」にあてはまると考えられる。

本章の冒頭で引用した例四五に「末の世の賢王」、「末の世いとくちをしく」とあるが、「よき人」ここでは「賢王」が、「時世」ここでは「末の世」にも「あはせ給はで、ひさしくもをはしまさゞりけるにや」ということで筋が通る。なお、「末の世」に、帝位が長く保たれたという例は二つあるが、いずれも極めてまれなこととして扱われている。

例五七　末の世の御門、二十一年まで保たせ給、いとありがたき事なり。（五〇―一五）

以上のことから「時世にもをはせ給はで」は「時世にもあはせ給はで」の誤りと考える。これにより下二段活用独自の用例はなくなる。

さらに言えば、下二段活用の連用形「おはせ」は、サ行変格活用の未然形と共通する「おはせし」「おはせしか」のみとなる。下二段活用とサ行変格活用の違いは連用形が「おはせ」か「おはし」かにあるが、連用形「おはせ」の用法が下二段活用としては、あまりに不備である。「おはす」の基本はサ行変格活用とするのが妥当であろう。

三　四段活用の可能性について

ここでは一3で掲げた「ぞ―おはす」「なむ―おはす」「おはしし」「おはししか」を取り上げる。

1　「ぞ―おはす」「なむ―おはす」

用例を再び掲げる。

例四九　よき上達部たちにぞおはすと（一四八―三）

例五〇　あまり足ぞはやくおはすとて、（一五九―九）

例五一　上西門院にぞをはすと（二四三―八）

例五二　いとらうある人になむおはすとて、（一六七―六）

「おはす」がサ行変格活用であるなら、これらは「ぞ」「なむ」の結びが終止形になっていると言えるものであるが、その類の例は他にもある。「ぞ」の結びが終止形になっているのは次の五例である。

例五八　後にそえたてまつられ侍とぞ聞え給き。（一三一―一〇）

例五九　僧都など聞ゑし折ぞせらると（二七―四）

例六〇　博士ぞ、御侍読に参らると（七六―四）

例六一　式部大輔ぞ書ゝると（八一―八）

例六二　紫式部とぞ世には申なるべし。（七―六）

「なむ」の結びが終止形になっているのは次の一例である。

例六三　やむごとなくなむ侍り。（二〇一―七）

「ぞ―（ら）る」が三例あるが、本来の「ぞ―（ら）る」はない。これは「ぞ―おはす」が三例あるのに、「ぞ―おはする」が一例（例三八）のみであるのとやや似た傾向である。このようなことから「ぞ―おはす」「なむ―おはす」は係り結びの乱れと見ることができそうなので、これらの「おはす」を四段活用の連体形としては扱わない。

なお、「ぞ―おはす」「なむ―おはす」について宮地幸一氏は「係結法の弛緩か作著者のくせであろうか」[10]とし、小久保崇明氏は、「おはしし」「おはししか」や院政期以後の他の作品の用例とあわせて「四段活用であるとみること極めて

自然であって」[11]としている。ただし、例五一は掲げていない。筆者の立場は宮地氏に近い。

2　「おはしし」「おはししか」

用例を再び掲げる。

例四六　堀川の帝の位にをはしゝ時、（一四六―一〇）

例四七　品のすぐれてをはしゝにや、（一六二―一一）

例四八　時の関白にをはしゝかば、（一三四―一二）

三例の使用対象は帝、宰相中将、関白である。宮地氏は「おはしし」の二例について

待遇上から言えば、用例⑤は堀河天皇、⑥は信通宰相中将であるから、⑤の方は尾張本・前田家本に「おはしましゝ」とある方が妥当である。⑥は尾張本に「をはしける」とある方が、形の上からは異例でなくなる。[12]

と述べている。

帝、院に「おはす」が用いられることは、少ないながらある。次の三例である。

例六四　上つねにおはし、（一三六―八）　帝

例六五　しのびて聞へ給事などもおはしけるなるべし。（二四一―一五）　帝

例六六　四十五六の御年のほどにやをはしけむ。（四六―四）　院

故に、堀川の帝に用いられた「おはしし」の例四六は認められる。宰相中将に用いられた「おはしし」の例四七、及び関白に用いられた「おはししか」の例四八も、使用対象の面から否定することはできない。また、本稿では諸本の異同には触れないので、「おはしし」「おはししか」は四段活用の「おはす」の連用形を用いたものと見得る。

しかし、これだけであるなら、四段活用を持ち出すまでもないのではなかろうか。「き（終止形）」がサ行変格活用の連用形「おはし」に接続するのに引かれて、「し」「しか」も同様の接続をするゆれが生じたと見ることができるからである。1・2により、四段活用を認めないことにする。

おわりに

以上、『今鏡』の「おはす」の活用を見てきた。下二段活用は認められず、四段活用と見られそうなものも、係り結びの乱れやサ行変格活用内部のゆれの可能性があり、四段活用とは認めがたいことを述べた。『今鏡』に限ってではあるが、「おはす」はサ行変格活用であると考える。

注

（1）山口明穂・他編『日本語文法大辞典』（明治書院　二〇〇一年）「おはす」の項（藤井俊博執筆）

（2）宮地幸一『おはす活用考』（白帝社　一九六二年）
（3）小久保崇明『大鏡の語法の研究』（さるびあ出版　一九六七年）
（4）榊原邦彦・他編『今鏡本文及び総索引』（笠間書院　一九八四年）
（5）注（2）同書二二九頁
（6）海野泰男『今鏡全釈（上・下）』複製版（パルトス社　一九九六年）上三五一頁。底本は畠山本（国史大系本）。
（7）日本国語大辞典第二版編集委員会・他編『日本国語大辞典　第二版』第一～一三巻（小学館　二〇〇〇～二〇〇二年）「よに在（あ）り」①②。
（8）注（7）同書「ときに遭（あ）う」。
（9）注（7）同書「よに合（あ）う」。
（10）注（5）に同じ。
（11）注（3）同書五五頁。
（12）注（5）に同じ。「おはししか」を扱っていないのは、国史大系本で「をはしましゝかば」（一一六頁）となっていることによると考えられる。

（かわぎし・けいこ　商学部教授）